

## 2 ファイアパーク設置・運営上の留意事項

### (1) 施設について

#### ① 安全性に配慮する

ファイアパークは、火災などの人的影響を与える事象を体験させるものであるから、実際の火を使用したりするなど現実に近いければ近づけるほど、ある程度の危険性を伴うことになる。しかし、ファイアパークという不特定多数の人が集まる施設であるから、敷地内にいる人全ての安全が確保されていないなければならない。そのため、各施設にハード面での安全装置を多重設置するとともに、ソフト面でも、安全管理並びに防災指導方法についてインストラクターを十分訓練し、適所に配置しておくことが必要である。

#### ② 地域の特性を考慮する

ファイアパークを利用する人として想定しているのは、パークが設置されている都道府県や周辺の都道府県に居住、通勤、通学等している人たちである。火災をはじめとする各種災害の様相はわが国の中でも一律ではなく、台風、頻度、フェーン現象による市街地大火の可能性、地震の頻度、雷・地震・火山等、地域による特徴もある。このため、ファイアパークの設置に当たっては、全国共通的な視点の他、ファイアパークの建設地のある地域や地方の地

形・地盤・地質等の特徴、人口や年齢構成、気象条件等の災害に関係する特性のほか、その地方で過去に大きな被害を受けた火災や災害の事例等があれば、それらを十分考慮した施設とすることなどにより、より地域に密着した施設とすべきであると考えられる。

③ 地域の防災教育の拠点としての位置づけを持たせる  
各市町村の消防機関では、幼・少年消防クラブ、婦人防火クラブ、自主防災組織等を組織して防災教育等を実施しているが、必ずしも教育の拠点となる施設を有しているわけではなく、幼稚園、小学校等の教室や必要に応じて消防署の施設を利用する等の運営方式となっている場合が多い。また、活動内容もそれぞれの指導者や消防職員等が独自に工夫して実施している場合が多く、相互の情報交換やノウハウの蓄積が必ずしも充分とは言い難い状況にある。防災教育の実をあげるためには種々組織されている防災関係団体の連絡調整や情報交換、ノウハウの蓄積、訓練場所の提供等が円滑に行われる機関が存することが望ましい。ファイアパークに、これら地域における防災関係機関の活動拠点としての位置付けをもたせることは、ファイアパークそのものの利用促進、PRの面からも効果的である。

④ コンセプトの明確化とイメージ作り  
コンセプトはテーマパークの命であり、分かりやすく明

確なものとする必要がある。例えば、ディズニークラウドはその言葉自体がコンセプトであり誰もが理解できずる。本施設では、「防災」というコンセプトを明確に表現することが重要であろう。そのためには、各施設の形態から従業員のユニフォームに至るまで統一された明るいイメージをつくる（CIの必要性）必要がある。

#### ⑤ 展示演出手法を工夫する

各施設で、何を見せたいのか、何を教育したいのか、何を体験させたいのか、何を楽しんでほしいのかを明確にし、そのために考えられる最高の技術を駆使した施設とする必要がある。最近の博覧会、テーマパークなどは同じ展示手法の焼き直しであることが多い。観客の「慣れ」という意識変化に遅れてしまうと、つまらないと思われてしまい、来館者に感動を与えることができなくなってしまう。人々に面白さ、楽しさ、感動などを与える施設とするべく展示手法を十分に検討しておくことが必要である。

屋内施設については実体験が制限されていること、施設の展示を適宜見直さないと時代の実態とかけ離れた内容となるおそれがあること等の問題点がある。これらの問題点を補完するため、屋外施設は、特に自由で多目的に活用される施設となるよう配慮する必要がある。

インスタクターの指導による方式だけでは来館者の数

に制限があるので、一定の来館者を期待するには単なる展示のみの部分も必要である。この場合、参加、体験しなくても見るだけでも楽しかったという印象を与える展示の工夫が必要である。

⑥ ハード面での全国的な統一とソフトの互換性を配慮する  
全天周映像の施設は、直径15m程度で100人程度収容することが可能であり、体験学習のためには極めて有力な手法であるが、映像ソフトの開発には相当の費用がかかるなどの問題もある。全天周映像施設に限らずビデオやパソコンなどこの種の映像機器等については、ハードを全国的に統一することなどにより、映像ソフトを全国のファイアパークで持ち回りで使用可能とするなどの配慮をすることが望ましい。

#### (2) 運営について

##### ① 運営形態の検討

各施設に応じた運営形態（公共団体の直営、運営財団、第3セクター、民間委託、その他）の長所、短所を整理し、各々のファイアパークに最も適したものを選定することが必要である。その際には、事業計画（投資計画、支出計画、資金計画等）をきちんと整理しておくことが重要である。

運営形態に応じて入場料徴集の可否、徴集する場合の金額（運営費すべて、人件費以外の運営費、光熱費のみ等）等、運営費用と料金体系の関係について十分検討を行う必要がある。

ファイアパークの楽しさの部分をうまく維持していくため、また、施設としての活力を保つためにも、行政機関の力だけでなく、スポンサー付施設（冠施設）設置の可能性や民間活力を活用した運営方式の検討も必要である。

② 地域の学校・各種団体、企業等との連携・協体制の確

立

1でも述べたように、ファイアパークの主たるターゲットは小中学校の遠足や少年消防クラブ、婦人防火クラブ等の団体利用である。地域の防災水準の向上という面だけでなく、ファイアパークの安定的運営のためにも消防機関はもちろん教育委員会や学校などとも積極的に接触して恒常的、計画的な利用者の確保を図ることが必要である。また、施設の作り方によっては企業研修の場とすることもできると思われるが、そのような運営方式を考えるなら、建設当初からそれに応じた配慮をしておくことが望ましい。

③ 名称を工夫する

テーマパークの名称は、そのパークのイメージを決定付

ける重要な要素である。

テーマパークの内容についての情報を持たない一般住民はその施設の名前を聞いて、その施設の内容を想像するものである。もしその名前が自分の持っているポキヤブラリーの中にあるものであればそのように想像するであろうし、もしポキヤブラリーにない用語であればそれぞれの人によりまちまちなイメージを持つであろう。本報告書においては、これまで「防災をテーマとしたテーマパーク」を「ファイアパーク」と呼んで検討してきた。この施設が地域住民等に斬新な感覚で受け入れられるためには単なるありさたりの名前では不適當であるが、感覚のみに頼った新語等を作った場合にはその言葉やイメージをより上げるために膨大なエネルギーを必要とする。実際に個々のパークを造っていく段階では、そのかねあいに充分配慮しながら、その施設内容、運営方法、地域の特性等に応じたその施設のコンセプトを代表する魅力ある名称を工夫することが施設成否の大きな鍵となっている。

④ リピーター対策を考える

災害に備えての体験や訓練は、災害の発生防止と実際に災害が発生した場合に適切な対応ができることを目的として実施されている。この種の体験は一度の体験では不十分であり、繰り返し身体でおぼえてこそ、適切な対応をとる

ことができる。そのためにはファイアパークにおいても繰り返し利用し体験される必要があるが、施設としても、一度利用した者が、ファイアパークに対する興味を持続して、「まだ行ってみたい。」という気持ちにすることが必要である。そのためには常に施設の展示・体験内容を興味深いものにしておくことが必要であり、タイムリーなイベントの開催や一定の期間ごとに施設内容の入れ換え等を行うことも必要である。また、すべての施設を一時期に設置できない場合は、1期工事、2期工事等と段階的に整備する方策も、利用者の興味を長く維持させる一つの方策であると考えられる。この場合基本的な施設については1期工事で整備し、リピーター対策も含め、付加的な機能を順次追加するよう配慮する必要がある。

### ⑤ インストラクターの活用

ファイアパークの最大の特徴は来館者が自ら体験し、実習することにある。この特徴を最大限活かすためには、専門的能力を有したインストラクターが適正に配置されていることが極めて重要となる。しかし、インストラクターには専門的能力を必要とすること、人件費が極めて大きな経費を占めると考えられること、慢性的人手不足の状態にあること等多数の問題がある。施設に対して常に一定のインストラクターを確保し、ファイアパークのレベルを維持す

るためには消防機関のOB職員等を有効に活用することが考えられる。

### (3) その他

以上のように、ファイアパークの建設、運営に当たっては、コンセプト作り、展示学習施設・ソフトの開発、従業員のマニュアル等多くの分野で新たに開発を要する部分がある。こうした開発費用は民間事業においては知的所有権として将来他の営業活動に転用することにより回収すべきもので、個別の事業において回収するには負担が大きすぎる可能性がある。従って、ファイアパークについても、こうした開発にかかる共通のノウハウは、個別の事業で開発されたノウハウを1ヶ所に蓄積して、国民共通の財産としていくとともに、先行して開発した事業主体に対して一定の権利が確保されるようにすることなどにより、個別事業に対する負担を最小限に止めるようにすることが望ましい。

### 3 ファイアパークの建設と運営についての検討

ファイアパークについての基本的なイメージが整理できたところで、このような体験学習施設を公的に建設し運営していくことが可能かどうかについて検討してみよう。

建設費や運営費を検討するためには、1の(4)で検討したAタイプとBタイプについて、1の(3)で検討した施設のうちどの施設を盛り込むかなど、もう少し具体的に条件を設定する必要がある。

#### (1) Aタイプの建設・運営費及び利用者数

[条件設定]

- ・敷地面積 5 ha
- ・屋内施設 火災予防体験施設、通報避難体験施設、消火体験施設、地震体験施設、救急措置体験施設、映像ホール、展示コーナー（ビデオコーナー、パソコンコーナー）、その他管理部門等
- ・屋外施設 山中サバイバル体験施設、水上アスレチックと水上サバイバル体験施設、大地震都市内サバイバル体験施設、脱出型フィールドアスレチック、ミニ都市消防隊体験施設、ピクニックランド、屋外展示施設
- ・建物部分の延べ面積 5,400㎡

- ・運営要員 管理・事務部門 常勤3人、非常勤2人  
設備保守部門 常勤2人、非常勤3人  
インストラクター 常勤3人、非常勤24人

以上のような設定だと、各施設毎の一般的な所要面積、同時体験可能者数、建物費用、施設費用等から、建設費は、建物建築費20億円、施設費35億円、屋外整備費5億円で建設費合計60億円程度と計算できる。(土地の取得費用については地方によって違いがあり過ぎるためこの計算には含めていないので、新たに土地を取得して建設する場合には、別途土地取得費用を加算して考える必要がある。)

また、運営費としては類似の施設の例から、人件費、光熱水費、施設保守費、消耗品費その他で年額5～6億円程度と見込まれる。

一方、このAタイプのファイアパークの利用者数は最大限どの程度になるだろうか。カリキュラム型の施設と非カリキュラム型の施設の利用配分によって変わってくるが、平日の場合は、カリキュラム型を屋内施設2コース、屋外施設2コースとしたり、あとの時間は非カリキュラム型の施設を利用するものとする、最大500人程度が利用可能である。

休日の場合は、カリキュラム型については4コースとれるものとし、非カリキュラム型の施設はカリキュラム型のコースをとらない人も含めて最大限利用されるとすると、最大2,000人

程度が利用可能である。

年間利用可能日を300日とし、そのうち平日型が200日、休日型が100日とすると、キャンプするコース以外の利用者は年間最大30万人程度となる。

またキャンプするコースの利用者は1回最大300人程度であるので、年間60泊の利用があったとして年間最大18,000人程度となる。

## (2) Bタイプの建設・運営費及び利用者数

[条件設定]

- ・敷地面積 2 ha (全敷地 5 haのうちフェアイパーク専用部分)
- ・屋内施設 通報避難体験施設、消火体験施設、地震体験施設、映像ホール、展示コーナー、その他管理部門
- ・屋外施設 山中サバイバル体験施設、脱出型フィールドアスレチック、ピクニックランド、屋外展示施設
- ・建物部分の延べ面積 2,500㎡
- ・運営要員 管理・事務部門 常勤2人、非常勤1人  
設備保守部門 常勤1人、非常勤2人  
インストラクター 常勤2人、非常勤15人

以上のような設定でAタイプと同様に考えると、建設費は建物建築費6億円、施設費16億円、屋外整備費3億円で、建設費

合計25億円程度となり、運営費は年額約2億5千万円～3億円程度と計算できる。

また利用者数については、最大で、平日200人、休日1,000人、キャンプするコース以外の年間利用者数14万人、キャンプするコースの年間利用者数6,000人となる。

## おわりに

以上「防災をテーマとしたテーマパーク」についてかなり具体的にイメージを描きその可能性について検討してきた。本報告書では各施設の内容について具体的に述べているので、これらの施設をメニューとして建設されたものがファイアパークである、という印象を抱かれるかも知れないが、このように具体的に述べているのは、施設全体という「総論」のイメージをつかんでいただくために「各論から考える」という手法で検討したためである。大事なことは「この種の手法によって防災に関するノウハウを身につける施設を公的に建設し、運営していく」ということであり、各施設が本報告書で提案したようなメニューからでき上がっている必要は必ずしもない。

むしろ、各地方公共団体が地域の実情に応じて「防災をテーマとしたテーマパーク」を主題とする様々なアプローチや提案を行い、都市公園事業など、他のプロジェクトと一体となった多様なファイアパークが建設されることを期待したい。

世の中はテーマパークばかりで、全国各地に様々な趣向のテーマパークが計画されているが、「ファイアパーク」はテーマパークの手法を用いた教育施設として位置づけることができるため、公的に建設することが可能であるし、運営についても地域や学校などとタイアップすることが容易であるので、計画倒

れが心配されている他のテーマパークとは一線を画することができる。

このような施設で、子供の頃から防災に関するノウハウを身につける意義は長期的にみるときわめて大きいと考えられるので、その実現に向けて今後積極的に努力をしていくことが必要であると考える。

(1) 火災・救急に関する体験学習機能

| 機能項目  | 体験学習の内容  | 施設イメージの例  |
|---|--|---|
| 火災の知識についての教育<br>・火災、消火に関するメカニズム、知識を与える                        | 燃焼の3要素（燃焼物、酸素、温度）、延焼拡大のプロセス、フラッシュオーバーなどの火災に関する知識を教える。<br>燃焼の3要素の内、1つを取り除くと消火が可能であることを教える。  | ・映像により、燃焼、消火の理論を教える。<br>・実験室を作り、インストラクターが実際に燃やしたり、消したりすることで理解を深める。<br>・パソコンゲームにより、燃焼、消火の理論を教える。   |
| 出火要因の知識とその予防対策についての教育<br>・火災は様々な要因で発生することを身近な事例をもとにわかりやすく知らせる | てんぷら油はある一定以上の温度になると発火することを教える。（一般にガスコンロの火が引くと思われている）<br>特に近年の花火は長距離を飛んだり、火薬量が多く、火災発生並びにそれに伴う火傷事故の要因となることを教える。<br>焚火を経験する機会が少ないが、子供達にとつて興味深い一方で危険であることを教える。 | <火災予防体験ゲーム><br>・室内に、マンションの1室を模したセットを作り、中には台所、居間、寝室、浴室などを作る。<br>10人程度のグループをつくり、その室内にある火災の発生要因（左記）を一定時間でさがさせ、発見した要因をコンピューターの採点機に入力させる。見落したものがあれば部屋から出る前に映像による模擬火災が発生する。なお、見落したものについては、後でインストラクターが指導する。さらに、個々の要因がどのような火災を発生させるかという映像をつくり、見せることで理解を深める。   |
| 火災発生とその予防   | LPガス爆発火災<br>都市ガス爆発火災<br>レンズの集光による火災<br>たばこによる火災<br>家庭内危険物からの火災<br>こたつ、アイロン等からの火災<br>石油ストーブからの火災<br>放火火災<br>スプレー缶の爆発<br>煙、有害ガスの発生                           | プロパンガスは漏洩時、底部に溜りやすいことからそのメカニズムや漏洩時の対策について教える。<br>都市ガスは漏洩時、高いところに溜りやすいことからそのメカニズムや漏洩時の対策について教える。<br>子供の身の回りにおける虫眼鏡、金魚鉢等の集光作用により火災が発生することを教える。<br>寝たばこ、たばこの不始末が火災の原因となることを教える。<br>灯油、アルコール、ペンジンなどの家庭内の危険物について教える。<br>こたつ、アイロンなど家庭内の電気製品の取扱い方を誤ると火災の原因となることを教える。<br>石油ストーブの給油方法、整備などを教え、火災の原因となり得ることを教える。<br>放火火災が火災の発生要因として大きいことを教える。<br>スプレー缶はそのまま投棄すると爆発する恐れがあることを教える。<br>火災にともない発生する煙、有害ガスについて、その種類、性状、恐ろしさ等について教える。 |



| 機 能 項 目  | 体 験 学 習 の 内 容  | 施 設 イ メ ー ジ の 例   |
|--|--|---|
| <p>通報体験<br/>・ 火災発生時の通報について体験させる</p>                                    | <p>大声は訓練していないとなかなか出せない。火災時には大声で周囲の人に知らせることが大切であるので、騒音計等を活用したゲーム等により体験させる。</p>  | <p>〈通報・避難体験ゲーム〉<br/>・ 集団旅行（修学旅行等）で、ホテルに宿泊している状況を設定する。セツトはホテル（又は旅館）とし、各室に数人ずつが入ったところからスタートする。非常ベルが鳴り、非常放送がされている中で、逃げる立場として何をすべきかを体験させる。（エレベータを使わない、避難階段を使うなど）。防火戸やスプリンクラーなどの設備も設置する。</p>   |
| <p>避難体験<br/>・ 避難器具を体験させたり、避難行動を体験させることにより認識を深める</p>                    | <p>電話の種類による119番通報の方法の違いを体験させ、火災発生場所等をはつきりと伝えるという通報体験をさせる。</p> <p>煙の毒性、危険性（刺激臭、熱気、COガス、酸素濃度の低下など）について認識させ、屋内における煙の充満と拡散について教え、煙の中での避難行動について避難経路の選択、避難姿勢などについて体験させる。</p>   | <p>廊下には、映像、疑似煙、におい、音声などで火災発生時の臨場感を出すようにし、その中で避難させる。廊下を迷路のようにしておき、その中で避難させ、一定時間以上たつた場合は死亡と判定する等のゲーム性をもたせる。</p>   |
| <p>消防用設備等の作動についての知識<br/>・ 目頃、目にする機会が少ない消防用設備等の作動について実際に見せ、その状況を教える</p> | <p>団地やマンション等のバルコニーに設置してある仕切り板のセツトを破壊して隣戸へ避難することを体験させる。</p> <p>防火戸により、階段室が防火区画として火災や煙から遮断されることを教える。さらに、防火戸がくさび等により常時開けられた状態になり、肝心なときに役に立たないことが有り得ることなど防火戸管理の重要性を教える。</p>  | <p>50人程度の1クラスを10人程度のグループに分け、グループ間で競わせる。</p> <p>さらに、119番通報の体験も合わせて行う。体験終了後には、インストラクターが指導する。</p>  |
| <p>立てもり体験<br/>避難が困難となった場合、救出されるまでの間、立てもりためのノウハウについて体験させる</p>           | <p>アパートなどに設置されている防火シャッターの仕組みと効果等について教える。</p> <p>スプリンクラー設備のしくみとはたらきについて、その作動状況を実際にみせることにより教える。</p> <p>自動火災報知設備のしくみとはたらきについて、その作動状況を実際にみせることにより教える。</p> <p>風呂の水を出口のドアや壁にかけることにより乾燥を防ぎ、延焼を遅らせる。</p> <p>ホテルなど、ドアの下の隙間に十分に濡らしたバスタオルやシート等を入れて目張りをすることで煙の侵入を防ぐ。</p> <p>濡らしたマットレスをドアに立てかけたり、燃えそうなものを火から遠ざけるなどの考えられる方法を考えさせる。</p> | <p>各種の避難器具等を配した室内アスレチッククジムを作つてタイムを競う。</p> <p>〈立てもり体験ゲーム〉<br/>・ 上記と同様のシチュエーションの中で、避難開始が遅れて廊下に逃げられない場合は、立てもり体験を経験させる。室温を高くし、疑似煙を発生させる中で、例えば10分間耐える体験をさせる。</p> <p>立てもりのためのノウハウを駆使すると状況が良くなるようにしておき、終了後にインストラクターが指導する。ゲームの場合には、避難行動をとつた場合に比べて持ち点を低くしておく必要がある。</p> |
| <p>心 急 対 応</p>   | <p>避難器具の使用方法</p> <p>マンションベランダ仕切り板破壊</p> <p>防火戸</p> <p>防火シャッター</p> <p>スプリンクラー設備</p> <p>自動火災報知設備</p> <p>風呂の水</p> <p>目張り</p> <p>その他の立てもり時の方策</p> <p>救助要請</p>  | <p>救助要請<br/>電話、窓から布切れを垂らす等考えられる限りの救助要請方策を実行させる。</p>   |

| 機能項目   | 体験学習の内容   | 施設イメージの例  |
|--|---|---|
| 初期消火体験<br>・消火用の設備、器具を実際に使用させてみる。ゲーム性をもたせることが可能 | 初期消火のポイント ①可能な限り火元に近づくと、②炎、煙、熱から身を守るために姿勢を低くする、③風上に位置する、④火元に確実にかける、⑤いつでも脱出できるようにする、⑥初期消火のチャンスは3～5分、火災種別と適応する消火器具について教え、適切な初期消火が大火災の発生を防ぐことを教える。 | 消火体験ゲーム<br>・マトリックスグリッドと各種消火用機器を準備し、マトリックスグリッドに写し出された火災の種類に応じた消火機器を使って消火させるゲームを行う(屋内)。<br>・屋外で、数人ずつのグループをつくり、消火ポンプで放水を行い、陣取り合戦を行う。<br>(中学生以上を対象とする)            |
| 消火器による消火方法                                     | 消火器を実際に扱うことで消火器の使い方を体験させる。  |   |
| 屋内消火栓による消火方法                                   | 屋内消火栓がどのようなところに設置してあるか、またどの様な使い方をするのかを教え、実際に、①起動ボタンを押す、②ホースを伸ばす、③バルブを開ける、という操作方法を体験させる。   |   |
| 水や砂による消火方法                                     | 火災の種類によっては水や砂、布団など身の周りにあるものによる消火も可能であることを教える。   |   |
| 消火ポンプによる消火方法                                   | 消火ポンプの使い方を体験させ、放水反動力を体験させる。   |   |
| 指揮・管制体験<br>・災害現場、指令室等における指揮のシミュレーションを体験させる。    | 指令室における出場指令について、火災発生時の電話の受付、消防車、救急車の出場命令のシミュレーションを体験させる。<br>災害現場の指揮者として、集合した消防車、隊員の指揮命令を、シミュレーションで体験させる。  | 指揮・管制・消防活動体験<br>・消防署の指令室と、火災現場のセットをつくる。各々の役割を、①119番する人(初期消火も行う)、②119番を受けて指令する人、③災害現場に消防車で行き活動する人などとわけて、実際に、火災発生から消火までをシミュレーション体験させる。個々の役割を事前にインストラクターが指導しておく。 |
| 防災センター指揮体験                                     | ビル等のセンターでの火災発見、通報、初期消火、避難誘導などの一連の防災活動をシミュレーションにより体験させる。   | <フアイアファイトイニングゲーム><br>・フライトシミュレーションのように消防用ヘリを使った消火救出を3D映像を用いてゲームで体験させる。  |
| 三二街区における消防活動体験                                 | 梯子車、ポンプ車、照明車、救急車、救助車、ヘリコプター、消防艇などによる消防活動をミニカー等による体験を通して理解させる。   |   |
| 初期消火対策   |   |   |
| 消防署員等の活動内容                                     |   |   |

| 機 能 項 目   | 体 験 学 習 の 内 容  | 施 設 イ メ ー ジ の 例  |
|---|--|--|
| 救急体験<br>・ 救急現場を模した状況を作り、各種救急手法を時系列的に体験させる                                       | 家庭、防災組織、事業所等に設置しておくべき救急用の資機材について教える。<br>意識、呼吸、脈拍などの容態観察を人形等を相手に体験させる。  | <救急体験><br>・ 年齢により、コースをいくつか設定する。<br>① 小学校低学年以下<br>友達が怪我をした際の対応を体験させる<br>(人を呼ぶ、止血する、動かない等。)<br>② 小学校高学年～中学生<br>容態観察、止血、包帯などの簡単な救急処置の内容を体験させる。<br>お互いに傷病者と救急処置をする人となつて、体験させる。<br>③ 高校生以上<br>訓練用人形を使い、人工呼吸、心肺蘇生法などの救急体験をさせる。<br>* 頭をうつた、プールで溺れたなどのいくつかの条件を設定して体験させる。 |
| 資機材の準備<br>容態観察<br>気道確保<br>人工呼吸<br>心肺蘇生法<br>止血法<br>ほう帯法<br>骨折固定法<br>搬送法<br>体位管理等 | 口の周りのおう吐物・唾液などの清拭、ついで口腔内の清拭と吸引、おう吐をきたしているときは側臥位にする、衣服をゆるめ、下顎拳上などの処置を体験させる。<br>呼吸吹き込みによる人工呼吸の方法を訓練用人形などを利用して体験させる。<br>人工呼吸、心臓マッサージを併用して行う心肺蘇生法を、訓練用人形を利用して体験させる。<br>圧迫止血、指圧止血、緊縛止血などの各種止血法を体験させる。<br>圧迫包帯、被覆包帯、固定包帯などの各種包帯法を体験させる。<br>上腕部、前腕及び手首、下腿部などの各部位毎の固定方法を体験させる。 | ・ 映像と大道具、小道具等により現場の状況を設定し、あらかじめ映像等によって教育しておいた措置がとれるかどうか競わせる。   |
| 応急担架の作り方、担架搬送方法などを体験させる。  | 頭部をあまり低くしない、保温に気をつけるなどの救急時の留意事項を教える。   |  |

救急活動内容

(2) サバイバル体験機能

| 機能項目      | 体験学習の内容   | 施設イメージの例   |
|-----------|---|--|
| 衣食住の基本的活動 | <p>テントを携帯している場合はテントを張り、携帯していない場合を想定するときは杖葉等を利用して、雨風をしのげる場所を確保する。この場合は、乾燥した地点に設営することが重要となる。さらに、トイレなども作る必要がある。</p> <p>石などで囲った爐(ろ)を作り、通風と火種を確保した焚火をおこす。火種を絶対に絶やさないと考えることが重要。</p> <p>まず、川などを見つけ、水を確保し、それを十分に煮沸や濾過する事により飲料水を確保する。</p> <p>動物、魚、木ノ実など食糧となり得るものを採し、それを食べられる状態に料理する。</p> <p>手にはいるものを活用して衣服を作る。</p> | <p>山中サバイバル体験</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・グループ、クラス等の集団で、山にハイキングに行き迷ってしまったという状況を設定する。</li> <li>夕方から、朝までのそのグループでの行動について、何をすればよいのかをインストラクターの指導の下で体験させる。</li> <li>屋外のキャンプサイトにて行う。</li> <li>フィールドアスレチック施設も活用する。</li> </ul>   |
| その他の必要な活動 | <p>煙、旗など上空や遠くから分る方法で自分の存在を知らせる。</p> <p>昼間は、時計の短針を太陽の方向に合わせ、12時と短針の2等分線が南、夜は北極星の方向が北ということ把握する。さらに、地図上で自分がどこにいるのかを把握する。</p> <p>自然の中で自分の身を守り、移動が困難なところを移動する体力、技術を身につける。フィールドアスレチック施設、プール等にて行う。</p> <p>傷口の消毒、骨折時の副木などの救急措置を行う。</p> <p>天気の予測方法、獣等からの身の守り方、二次災害防止方法(津波、山崩れ等)などを学ぶ。</p>                          | <p>水上サバイバル体験</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・船に乗っていて沈没したという設定のもとで、プールを使い、着衣のまま泳いだり救命胴衣をつけて泳いだりして、水上でのサバイバルを体験させる。</li> </ul> <p>雪上サバイバル体験(寒冷地向け)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・真冬の雪の中で遭難した状況を設定し、生き延びるための方策を体験させる。</li> <li>屋外のキャンプサイトにて行う。</li> </ul> <p>◎年令や経験によってコースの難易を変えられるようにする。</p> |
| 救急措置      |   |  |
| その他       |   |  |

自然型サバイバル体験

| 機能項目       |                          | 体験学習の内容  | 施設イメージの例   |                              |
|------------|--------------------------|--|--|------------------------------|
| 都市型ザバイバル体験 | 衣食住の基本的活動                | 浄水器、浄水錠剤などにより飲料水を作る。<br>簡易トイレを組み立てたり、地面に穴を掘りトイレを作る。<br>火のおこし方、燃料の作り方<br>家庭内の備蓄食糧などを利用して、食事を作る。 | <p>〈大地震時都市内ザバイバル体験〉</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>大地震、大火災が発生した状況を設定し、30人～40人程度の1フロアが、大都市で外部に対し孤立した場合に、電気、ガス、水道等がストップした中で生活を行う方法をインストラクターの指導の下で、体験させる。</li> <li>室内にセットをつくり、限られたものを活用する方法を体験させる。</li> <li>体験の始めに起震装置で地震を体験させ、ドアを開けて外に出たら町が瓦れきと化していた、などという演出を行うと効果的。</li> <li>さらに、救助体験等も合わせて行うことにより、ゲーム性を盛り込む。</li> </ul> <p>〈脱出体験ゲーム〉</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>地下鉄や、火災現場、倒壊したビルの瓦礫の下などから何分で脱出できるかを競うゲーム。</li> </ul> |                              |
|            | 閉所からの脱出、救助               | ロープアブリッジ渡過<br>ロープ登はん<br>梯子登はん<br>ほふく救出   |  |                              |
|            | ・マンション、瓦礫の下の閉所からの脱出方法を学ぶ | 煙道を模したところを探索して要救助者を救出する体験をさせる。   |  |                              |
|            | その他                      | 要救助者を確保につれて、障害物を突破する体験をさせる。<br>野犬等、身を脅かすものから自分の身を守る方法を体験させる。                                   |  |                              |
|            |                          | 障害突破   |  | 救助活動等の各種活動に用いるロープの結び方を体験させる。 |
|            |                          | 野犬等からの身の守り方  |  |                              |
|            |                          | ロープ結索  |  |                              |
|            |                          |  |  |                              |
|            |                          |  |  |                              |
|            |                          |  |  |                              |

(3) その他の機能

|             | 機能項目  | 体験学習の内容   | 施設イメージの例 |
|-------------|---|---|----------|
| そ<br>の<br>他 | ・モニュメント   | 火をテーマとするモニュメントを設置し、ファイアパークのシンボルとする。ともに火と正しく接する気持ちを醸成する。 |          |
|             | ・宿泊施設   | キャンパスサイトを設置し、集団生活の中で火の正しい取り扱い方法を学ぶ。                     |          |
|             | ・集会室  | 指導、反省会等を行うための集会場。                                       |          |
|             | <ul style="list-style-type: none"> <li>・駐車場等</li> <li>・管理施設</li> <li>・救護施設</li> <li>・食堂、売店</li> <li>・シャワー室</li> <li>・更衣室</li> <li>・その他</li> </ul> |   |          |